

共立女子大学文芸学部報

共立女子大学文芸学部報
第134号
発行日 2020年4月1日
編集・発行 共立女子大学
文芸学部
〒101-8437
東京都千代田区
一ツ橋2-2-1
発行責任者 深津謙一郎
創刊 1968年12月
題字 遠藤慎吾
第二代文芸学部長

学部報に関するご意見・感想を以下のメールアドレスまでお寄せください。
gakubuh@kyoritsu-wu.ac.jp
学部報は共立女子大学公式HPの「文芸学部」のコーナーでもお読みいただけます。
<http://www.kyoritsu-wu.ac.jp/>

第134号 主目次

第1面	トップエッセイ 美の旅 大学随想 学部長挨拶 特集 「新入生必読!! 女子大生あるある 困り事典」 卒業生コラム
第3面	心象点描
第4面	各セクションから

(今号の一言)
「私は気持の折り合いにはひとまず蓋をして「試合に負けて勝負に勝つ」の実践に取り組むことにした。」(2年・SY)

もうひとつの「大学随想」

林 幹夫

大学そもそも

ある大学の教員自治団体情宣紙に、古典的な、それゆえに原理原則の正しい理解に基づく真つ当な大学論を目にした。「大学とはそもそも、教育・研究という共通の目的を持つ教員・学生間の自発的・自律的な組織体(association)である」と。大学人にとっては言わずもがなの常識だから普段話題にすることが少ないのだが、これが根底から否定されるかもしれないという。記事全体からそれがまさかのことでなさそうな危機感が読み取れた。ほんとうならば由々しき事態である。

『羅英辞典』に、universitas: the society of teachers and students とある。大学とは教授陣と学生達が、同一目的に向かい、自分たちの研究環境を守るために集まり自然発生した生活共同体である。ポロニヤ、サレルノ、オックスフォード、パリ、……。大学では普通言語であるラテン語が用いられ、何の束縛もどこからの

圧力もなく、教授と学生による自由な立場での意見交換が展開された。同一の目的である、時空を超えた真理の探究の営みが繰り広げられた。ラテン語(ラテン語をいう地区)と呼ばれる特殊空間から発せられる研究の成果は社会に還元され、ために大学には治外法権的な特権が与えられ、行政も Support but not control (援助すれど支配せず)の原則で対応した。日本の私立大学の存在理由とも通ずるものである。

経常費の一割弱を占める国からの補助も含め、supporterの顔色を窺うことなく universities 本来の姿を保つことができる。ここでは、「援助者支配の代執行人」としての controller は原理的に必要がない。構成員各自の自律性を恃みとする「そもそも大学」に拘るか、それとも……。われわれは今、極めて重大な岐路に立たされているという自覚や如何。

教育と学問

学校教育は初等、中等、高等の

三段階に分けられ、就学年限などもほぼ世界共通である。大学入学の年齢になると、社会の正規の構成員と見なされ、選挙権が与えられるなど、法律的にも一市民として扱われる。そのように子どもと大人を截然と区別し、それぞれを別の対象として行われる初等中等段階の「教育」と高等教育の「教育」とには本質的な違いがなければならぬ。

能力が可能性でしかなく、十全に機能しない子どもには、しかるべき大人が庇護し監督者となつて、その不完全を補いながら、能力の開発・完成のために最善を尽くさなければならぬ。これに対して大学では、社会構成員としての最低限の性能を身につけているはずの学生の教育が行われるのである。それがどのようなものでなければならぬかはすでに明らかであろう。学生は大学にこれこれの教育を求めているのではないし、大学は高校までのように教育を教育として行うのではないということである。

人間と社会が理想に向かって進んでいくためには限りなく高度な学問知識が必要であり、その価値の大きさは計り知れない。しかも、それを手に入れる個々の営みは、それこそ大海の水を貝殻一つで掬ったくらいのものでしかない上に、掬えば掬うほど未知の領域はますます拡大する。その中で、学問の果てしない営みの火を燃やし続ける、それが大学である。

学生は、大学が求める諸条件を満たしていると認められて入学し、学問に専念することが許され、学問の営みは長期の訓練を必要とするから、その間、社会的生産に従事することを免除される。それも、獲得した能力によってやがて社会に奉仕することが期待されるからにはかならない。

大学で学生が自覚的かつ意識的に為すべきこと、それは進もうとする道に關連する領域の知識の基礎を習得し、必要に応じてこれを深化・拡張するための手段・方法を会得すること以外にはない。その過程で、専攻学問分野を中心に人生観や世界観が形成され、同時に、社会生活に必要な倫理的感覚や意志の陶冶がなされる。そのような教育や教養が学問を通じて身につけられる。物を作る技術を習得させることによって、スポーツや娯楽の機会を提供することによって、学問によって社会に奉仕することを目的とする機関、それが大学である。

研究と教育

一般に「研究」と「教育」を対して捉え、これが大学教員の任務であると考えられている。「研究



ボローニャ大学における1350年代の講義風景を描いた写本挿絵 (Laurentius de Voltolina 画/Kupferstichkabinett Berlin 蔵) ©Public Domain https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Laurentius_de_Voltolina_001.jpg

には、一定の時間と条件が整わなければならず、「教育」的作業にも一定の時間と専心が要求される。両者は同時にできない別の作業である上に、どちらも中断することのできない任務である。研究を論文作成、教育を講義と思ひなし、両者を統一しようとする試みは、両ら成功しない。研究と教育は、活動や作業で矛盾することがあるにしても、別のものではなく、「学問」という一つの事柄の二つの側面である。そして大学は、研究と教育が本質的に同一のものであり得る場所である。

学生の内には、専門的な学問ではなく、もっと一般的な教養を、あるいはもっと実践的な技術を希望する者がいる。しかし、それを肯定・許諾すれば、研究と教育が大学教員の二つの別々の任務という観念が固定してしまう。もとより、すべての学生を学者に仕立て

上げるためではない。将来どんな職業に就こうと、どんな人生を歩もうと、青年の一時期に学問という一つの価値に触れ、その意義を知ったということに意味がある。真理を探究する人間的営みとその成果をもって「学問」とするから、そこには人間の生活の仕方の本質に關する能動的精神が意識されている。そしてこれに絶えず新しい生命を与える。ここが大学の使命である。制度がどうであれ、この使命を背いて別に教育が行われるわけではない。

令和はカフェの時代だ。昭和の喫茶店派は肩身が狭い。カフェはミルルクホオルとともに昭和を彩る景色だったはずなのに、音引きが外れて平成に蘇ってからは飛ぶ鳥を落とす勢いである。▼客の入りからして違う。ノマドワークを引寄せられる。「子育てカフェ」「哲学カフェ」「サイエンスカフェ」のような呼称にちんと収まっている。もはや飲食を供する必要はない。「子育てカフェ」はラジオ番組のコーナー名だった。続く二つは各地で催されている交流会、講習会、いや、知的な運動の呼称らしい。学術交流のスタイルにワールドカフェ方式なるものもあるのだとか。これでは在来の「哲学研究会」「サイエンスラボ」もたじたじだ。▼ふと「ラーメン大学」「どんかつ」「麻雀」「パチンコ」を思い出す(いずれも店名)。「ラーメン大学」と「哲学カフェ」(等)を比べると、教育研究を行う「大学」なる漢語と、寛ぎの空間の「カフェ」という片仮名語の対比が目につく。供されるのはラーメン(等)の気楽な楽しみと、哲学(等)の高尚玄妙の道だ。「ラーメン大学」が軟+硬の組み合わせだとすれば、「哲学カフェ」は硬+軟である。前者は軟の浮薄を硬の権威で箔付する串談に違いない。後者は硬の海派を軟の親しみ易さで薄め、垣根を低くしようとする工夫であろう。▼大学は新しい価値や知を創り出す拠点である。直ちには咀嚼、消化しにくいことを教授する場である。判りやすいことを伝授する「大衆化」に奔るのではなく、判りにくいことにも取り組もうという挑戦者を迎える場であり続けたい。大学でカップラーメンを啜る喫茶店派も、この点ばかりは哲学カフェ派でなければならぬと思う。カフェが流行る訳だ。

(上野慎也・教授・文芸教養)



太陽神鳥

美の旅

曹 元春

昨年五月の連休中、四川省成都市にある金沙遺跡博物館を訪ねたが、この「太陽神鳥」を目の前にした時の感動は大きかった。黄金製のこの芸術品は、稲作を営む古代蜀人の太陽と鳥への崇拜心や宇宙観を表すとされているが、四羽の鳥と太陽の十二本の光芒は何を象徴しているのか、その問いがいまだに頭から離れない。

(教授・文芸教養)



新入生の皆さんへ

文学部長 深津 謙一郎

文学部では、他の多くの四年制大学と同様、卒業に必要な最低単位数が二四と定められています。

新入生の皆さんの中には、単位という考え方に馴染みがない人もいるでしょう。簡単に説明すると、単位とは各科目の内容をマスターするために必要な学修量を時に換算したもので、四五時間ぶんの学修に対して一単位が与えられます。ですから、大学四年間で二四単位数修得したということは、四五×二四で五六二五時間

ぶんの学修をしたことの証明になるわけです。

ここで注意したいのは、皆さんは、大学の四年間で五六二五時間の授業を受けるわけではないということです。たとえば、一年次の必修科目「基礎ゼミナール」は、二〇二〇年からの新カリキュラムでは半期で一単位与えられます。しかし、「基礎ゼミナール」全一五回の授業を全部足しても、学修時間の総計は、四五時間の半分の二二・五時間にしかなりません。そこで、残りの二二・五時間ぶ

んは、皆さん個々の授業外の学修によって補う必要が出てくるのです。シラバスには、毎回の授業の事前・事後学修についての記載がありますから、ひとまずは、これを指針に学修すればよいでしょう。ただし、シラバスに求められたことをするだけが、授業外の学修ではありません。

たとえば、読書や映画鑑賞、絵画鑑賞に耽ること。そして、その感想について、時間を忘れて友人たちと語り合うこと。あるいは、知らない土地を旅するというのもよいでしょう。——これらの経験は、特定のどの授業のための授業外学修というわけではありませんが、大学四年間で修得する二四単位(五六二五時間ぶん)の学修を構成する重要な要素となるはずで、あとになって、なにが活きてくるか分かりません。お金はさほどなくても、体力と時間には多少の余裕がある学生時代にしかできないことに、どんどんチャレンジしてください。

ただし、忘れてはならないのが、文学や芸術にとつては、「休止」という時間をもたない重要な意味を持つということ。これは、丸山眞男という思想家の言葉の受け売りですが(詳しくは、岩波新書の

「日本の思想」をお読みください)、ある種の煮物料理が、一晩寝かせることにより味が良くなるように、文学や芸術の学びでは、一見何も見えない(ように見える)時間が大切なのです。外から見れば「無為」かもしれませんが、ただ時間が経過する、そのこと自体の価値というものであるのです。

大学生活の中で、皆さんは少なくとも、一日二四時間×三六五日×四年間約三三〇〇時間を過ごします。高校時代に比べ、格段と自由度が増したこの時間をどう使うか(使わないか)。少なくとも、大学生としての皆さんには、この自由を持って余さないうで欲しいと願っています。

学び舎を離れて三十八年の歳月が流れた。大学時代は日本文学を専攻した。サークルは考古学愛好会に所属し、八王子に校舎を建設する際の発掘調査にも参加した。中世の館跡が発見されたが、その記録だけを残して建設が続けられる現実に、文化を継承していくには、「教育」が必要だと思ひ、教師を志した。幸い、母校の共立女子高校で国語教師になることができた。

日本語教師への転職

小池恵己子

た。日本語を教える仕事なら国語教師の私にもできると、高をくくっていた。ところが国語と日本語とは大違いだった。当時、紀尾井町にあった国際交流基金の日本語講師実習講座で研修を受けた。昼間は高校で教える



30年ぶりに訪れた教室。今はセミナーなどで使われている。(Helsinkiにて)

実技試験、面接を経て海外派遣が決まり、マレーシアに続いて、フィンランドで日本語を教える機会を得た。ヘルシンキ大学では三年間、日本語を教えた。昨年夏、三十年ぶりにヘルシンキを訪れた。かつての学生は皆五十代になり、日本語教師として活躍している人もいる。

仕事と家事の両立は今も私の課題だが、できる限り仕事を続けたい。外国にルーツを持つ日本在住の人が増えている今、その人たちのために私に何が出来るかを模索し、外国語としての日本語を学びつつ、今後も人々と関わっていかれたらと思う。

新入生必読!! 女子大生あるある 困り事典

特集

大学生になると、自身も環境も劇的に変わることが多く、戸惑ったり困ったりすることが起きます。自分自身のために、貴重な時間やお金、体力を無駄にしないようにしたいですね。共立の先輩たちのリアルなエピソードが何よりの参考になることでしょう。今回は、それらを「事典風」にまとめた特集を組んでみました。

いちげん (一限)

一限の授業のある日は朝の電車がとて混雑で、大学に着く頃には疲れはてて、前期は授業時間中に寝てしまうことが何度もあった。それで、後期は一限の授業を取るのをきっぱりと止めた。(二年 KY)

かくにん (確認)

入学間もなく、まだメールチェックの習慣が身に付かず、大学からの大事なお知らせの確認が遅れ困ったことがあった。それから、Gメールアプリと連携させることでいち早く通知が気付けられるようになった。(二年 KK)

かれし (彼氏)

女子大では出会いの場がマジで少ない。私はインカレのサークルで一応対処できたが、選ぶ時は慎重にするべきである。インカレの男の半数以上はクズだと思っただけが良い。(三年 TN)

かんけい (関係)

一番困ったのは、どう考えても人間関係である。軽度の人間不信を患っている私は、前期は新しい事をしようと積極的に動いたが、後期はプツリとスイッチが切れ体調を崩した。人間が怖くなった。それで、まずはキャパオーバー



きもち (気持)

納得できないままに入学して、自分の気持ちに折り合いを付けるのに困った。しかし、不貞腐れていれば時間はあっという間に過ぎ、負け犬のレッテルを自ら貼ることになる。私は気持ちの折り合いにはひとまず蓋をして「試合に負けて勝負に勝つ」の実践に取り組むことにした。授業、バイト、サークル、委員会、ボランティア、検定、インカレ、趣味などなど、ともかくあらゆることに手を出した。そのおかげで、自分の世界が広がり、沢山の尊敬できる人も出会うことができた。一年も経たないうちに自分が大きく変わったことに気付いた。(二年 SY)

きょうどう (共同)

共立に通っている子の多くが千葉や埼玉、神奈川などの自宅から遠距離通学している。住んでいる地域が遠くてバラバラで困るのが、授業での共同発表をするための準備である。大学に集まって作業を

きんせん (金銭)

大学生になって困ったのは、お金を使いすぎるようになったことである。アルバイトを始めて、自分の稼いだお金を持つようになった。貯金が苦手な私は、売店で好きなだけパンを買う、空き時間にはカラオケに行くなど、事あるごとにお金を使うようになってしまった。さすがにやばいと思ひ、後期はお弁当持参と空きコマを作らないことにした。そのおかげか、多少は無駄遣いが減った、ような気がする。(二年 KA)

けいご (敬語)

私は大学に入ってから敬語の使い方に困るようになった。高校までは、先生方に失礼のない言い方をする程度だった。それがアルバイトをするようになって、敬語を使わざるをえなくなった。先日、ある授業でご飯屋さん取材に行った時も、敬語がうまく使えずかみまくった。これはもう慣れるしかない。(二年 OH)

けつせき (欠席)

物語ではよく大学生は仲間と一緒に授業をサボって遊んでいるが、ぜったい休むべきではない。先生も周りの人も頼れないからである。だから一回でも休んでしまうと、取り返しがつかず困ったことになった。先生は平気で「休んで分

ことば (言葉)

一番困ったのは、言葉の違いである。私は沖縄県石垣島から上京してきた。最初は、地元方言を標準語に直すことに毎日必死だった。今はだいぶナチュラルに話せるようになったが、それでもたまにポロリと方言が出て友人に首を傾げられる。「方言女子って可愛いよね」と言われるが、本人にとっては田舎者の証しと紙一重である。せめて東京にいる間だけは、頑張って「東京の女子大生」をやりとげたい。(二年 MJ)

しごと(仕事)

大学に入ってアルバイトの仕事を始めたら、毎日がとても忙しくなり、時間のやりくりが困った。

しめきり(締切)

授業課題のネット提出が多いため、締切の締め切りに悩んだ。

じゆう(自由)

とにかく暇。サークルにも入らなかった。アルバイトをして時間にならぬ余裕があり、その時間をどう使うか困った。

じゆうじつ(充実)

何に困ったかと言えば、自分が普通の女子大生に向いていない。たことである。高校まではバリバリの体育会系だった。



じゆぎよう(授業)

一回の授業時間が中高の倍になり、最後まで集中して受けることができない。

じゆんぴ(準備)

私は授業九〇分の悪夢にしばしば苦しんだ。授業前の休み時間にトイレに行っても売店に行っても長蛇の列。

じよくじ(食事)

問題はメシである。昼休みに学食は論外で、コンビニに行けばどこもプーさんのハニートマト状態。

い。それでも今から何事であれ、自分の力で前に進めるようにしておきたい。

ださん(打算)

大学に入って、友達付き合いが多少計算的になってしまった。

つうがく(通学)

今でもかなり困っているのは、朝の満員電車である。

じよし(女子)

女子大に入って困ったのは、女子が本気で女子(女の子)って感じ。

せんたく(選択)

大学生になって困ったなと感じたことは数えきれないほどある。

なった。二年めは、全休日を作ることを優先するような登録はしなかった。

どつきよ(独居)

私は大学進学を機に上京し一人暮らしを始めた。

ともだち(友達)

と、ともだちができない!! 高校までと違ってすべて同じ授業同じ宿題の人なんていない。

のみかい(飲会)

コンパでのコールや人狼ゲームでは、強制的にビールを飲ませられる。

とうろく(登録)

入学して最初にしなければならぬことが履修登録である。

へいき(平気)

インカレで彼氏と出会うか、学内で友人を作るか。

むち(無知)

大学に入ると、ある程度大人として扱われる。

心象点描 なぜ学ぶのか? 滝沢明子



とある市民講座でフランス語を教えるようになり、三年がたつ。予想以上に高齢の参加者が多く、七十代は当たり前で八十代の方々もかなりいらしている。

れんらく(連絡)

最初に戸惑ったのは、欠席や遅刻などの緊急連絡をどこにすればよいかだった。

ようふく(洋服)

大学生になって毎朝の服選びに悩みまくった。

准教授

フランス語フランス文学 挿画・渡部 直(専任講師・家政学部児童学科)

